

前田育徳会尊經閣文庫蔵 『日本往生極樂記』解説並びに影印

宇都宮啓吾

目次

- 一、はじめに
- 二、書誌的事項
- 三、訓点に就いて
- 四、おわりに

一、はじめに

前田育徳会尊經閣文庫蔵本(以下、前田本)は、『日本往生極樂記』の伝本として、岩波思想大系本の底本となっているなど、資料的価値の高さが以前より注目されてきた資料である。又、全体の二分の一ほどに訓点が施され、当時の訓読の様相を窺うことも可能となる。

そのような点に於いて貴重な資料に、若干の解説と影印(並びに難読箇所一覧)を添えて公表させていただく。

二、書誌的事項

本書は、神奈川県称名寺(現在の金沢文庫)から前田育徳会尊經閣文庫所蔵になって後(明治期)に改装されて現装の四

つ目綴じの袋綴装となつた一冊(縦・27・8糎、横・21・3糎)である。現装の表紙には、中央部に「日本往生極樂記」とあり、右下に「湛睿」と記されている。表紙の裏には目録の一部と覚しい記述「聖徳太子 行基并 善謝 圓仁(慈覺)也・割書」 隆海/増命 無空(愛錢貨受蛇身/寫法花免蛇道・割書)があり、白紙一枚を置いて本文が始まる。但し、墨付第1丁は交漉紙で、本文とは別筆で序が記されている。この墨付第1丁の序は、字体等から考えて、江戸時代頃に補われたものである。

第2丁より本文が始まる。料紙は楮紙で、墨付26丁、一面8行から10行、一行18字から22字で記されている。全体に返点と句読点が付されており、11丁表5行目までには墨筆で本文と同筆と覚しき訓点(片仮名点・合符・声点)が施されている。又、後世のものとして覚しき訓点が12丁表には墨筆で、18丁裏と19丁表には朱筆で存する。

卷末の奥書に、

寛永元年五月十一日書寫畢
同日一交丁

とあるが本文の字体とは異なっており、寧ろ、第1丁(後補部分)の書写に関する記述と考えられる。その意味で、本文自体の書写時期を奥書から窺うことは困難である。

次に、原装の表紙に記載されている「湛睿」なる人物に就いて触れておく。

彼については、次の如き資料からその略歴を知ることが出来る。

①『本朝高僧傳』卷十七

釋湛睿。字本如。不知生緣姓譜。少隨凝然從事羯磨。遊雜華海。沖融圓理。後嗣禪爾。爲戒檀院學頭。三學共

備。一衆服徳。元應初受檀請。住鎌倉稱名寺授戒講經。法席日盛。元亨二年著教理鈔。建武元年撰纂釋三十二卷。翼解華嚴大疏。以某年卒於所住焉。

②『律苑僧寶傳』卷第十四

律師諱湛睿。號本如。自其少時有奇心遠識。出家入戒檀圓戒爾律師之門。學毘尼雜華。爾之門人。能得其奧者。唯師與盛譽而已。出世鎌倉稱名律寺。講揚宗教。會無告倦。登門受業者極多。皆宏之龍象也。師後終歿無知時代。所著有教理鈔及纂釋等若干卷。

③『招提千歲傳記』卷中之二

律師諱湛睿。字本如。爲竹林圓戒律師之徒。學毘尼華嚴二宗。爲人所美。妙入玄微。戒公門中。師與盛譽爲教華嚴之長也。入室習學尤多。所著教理鈔及纂釋等若干卷。其終未考之也。

右の記述を参看することによって、湛睿なる人物が若いときに東大寺の凝然に師事し、後に称名寺（現在の金沢文庫）に住して律宗と華嚴宗とを弘めた学僧であることが知られる。

湛睿の筆跡は先の記載にもあつた『華嚴演義鈔纂釋』（自筆稿本）によつて知られ、その筆跡と本書の筆跡とを比較してみると異なつてゐるように思われる。それ故に、現装の表紙に記された「湛睿」という名は書写者を示すものではなく、又、湛睿が書籍の収集家としても有名であることから推して、本書は彼の手沢本であり、その目印として「湛睿」と記名されてゐるものと考えられる。

三、訓点に就いて

先にも述べた如く、本書には、11丁までに鎌倉時代の筆と覺しい訓点が施されている。そこで、この訓点について述

べておく。

本書の本文部分の訓点は、次の如き仮名字体となっている。

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	〇 ロ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ タ タ	サ サ サ	カ カ カ	ア ア ア
他	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
イヨ、 ワト、 シヤナリ	キ キ	リ リ		ミ ミ	ヒ ヒ	ニ ニ	チ チ	シ シ シ	キ キ	イ イ
		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル ル ル	ユ ユ	ム ム ム	フ フ	ヌ ヌ ヌ	ツ ツ ツ	ス ス ス	ク ク ク	ウ ウ ウ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ エ	レ レ		メ メ	ヘ ヘ	ネ ネ	テ テ テ	セ セ	ケ ケ ケ	エ エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ ヲ ヲ	ロ ロ	ヨ ヨ	モ モ	ホ ホ	ノ ノ	ト ト ト	ソ ソ ソ	コ コ	オ

右に示した仮名字体表を参看すると、「ウ(ウ)」「ケ(ケ)」「ツ(ツ)」の字体は特徴的であり、鎌倉時代初期から中期頃の字体を反映しているものと考えられる。それ故に、本書の書写・加点時期を鎌倉時代初期から中期とすることが出来るであろう。

そして、このことは音韻面からも窺われる。

国語音の m・n 音の区別に就いては、「去^{イシ}年^シ」の如き n 表記のものや「翰^{フムテ}」の如き m 表記のもの等の古用に適用例の存する一方で、「染^{ソウ}」の如き m 音の無表記例と「成^{オホ}」の如き n 音の無表記例とが混在するため、国語音に於いて m・n 音の混同の起こっていることが知られる。

又、漢字音に於ける m・n 音の区別を見てみると、古用に適用例は「斂^{レム}葬^{サウ}」等の三例に対して、古用に適わず n 韻尾でありながら m 表記された例は「嗚^ム咽^{エムス}」・「淳^{スミ}和^ワ」等の六例が存し、国語音と同様、漢字音に於いても m・n 音の混同が看取される。更には、表記という観点からすれば、m・n 音に関わらず本書に於ける撥音韻尾はすべて m 表記となっており、m・n 音の混同が相当に進んでいたであろうことが窺われる。

以上の如き言語事象は、鎌倉時代初期から中期頃の事象であり、先の仮名字体による検討と相通じている。

本書の訓点には、「贈^{オク}」(ヲの誤記)・「透^{トウ}」(ツの誤記)の如き字形の類似に起因する誤記の存することから、本書は、移点された部分の存することが窺われる。言い換えれば、本書の親本にも訓点が施されていたことが知られる。

そのような目で本書の仮名字体を眺めてみると、鎌倉時代初期から中期頃の特徴を示す字体に交じって、「ㄐ」「ㄑ」「ㄒ」「ㄓ」「ㄔ」の如き字源の字体に近い片仮名や、踊字(シヅナリ)「ホト」の起筆位置が上字の右傍に位置するものも存している。このような字体は院政期頃の特徴であるため、書写者が親本の字体を忠実に写した結果、残ったものと考えられる。

つまり、本書は、鎌倉時代初期から中期頃に於いて院政期頃の加點本を書写すると同時に訓点をも施した資料であろうと予想される。但し、この点については訓点部分が全て同筆か否かによって異なり、可能性としては院政期から鎌倉時代中期にかけて何筆かによって加點されたと考ええる余地も残されている。この点については今後の検討に俟ちたい。

本書の訓読語法については、「使^{シム}厚^{コウ}葬^{サウ}之^シ」(文末助字)「之^シ」字の訓読「自^ミ謂^{クハシ}……定^テ煩^{ハシム}遺^イ弟^テ」(「ヲモヘラク」の呼応)

等を検討していくと、天理本の訓法と同様に、平安中期伝記類訓点資料の訓法と共通する。又、「登五臺山」^ニの如き過去の助動詞「ケリ」が存し、古訓法の存することも窺われる。

その他、本書に於いては、類音字表記（「彩帛」^白・「賞」^{生スル}）や拗音の長音化「杼」^{チヨツテ}等、国語事象としても注目すべき点が多々存する。今後、稿を改めて検討したい。

四、おわりに

本資料については今後とも研究すべき課題が多く、その一助として、本稿に於いては書誌的事項とそれに関わる訓点について若干を述べた。

多く和化漢文資料の中でも、訓点の施された資料は仏書や漢籍に比して少なく、又、同一作品に複数の加點された伝本は『將門記』など、僅かである。そのような点に於いても、『日本往生極樂記』には天理本と前田本とが存し、その訓点を比較検討することも可能となる。それ故に、今後は訓点の比較といったことを考えている。

〈付記〉

本資料の影印・解説、又、原本調査に就いては、前田育徳会尊経閣文庫御当局の御厚情を忝くした。記して深謝申し上げる次第である。

難読箇所一覽

3オ1 推^ス古^コ天^{テン}皇^ス之^ニ尊^ニ白^ス太子^ト万^ト機^イ志^ク委^ニ身^ス太子^ト聽^ク政^ニ之^日

3ウ9 持^テ之^レ經^ニ不^レ復^セ一^ツ紳^シ三^イ年^ト妹^ト子^ト可^ク持^テ来^ル者^五吾^カ弟

4オ1 子^レ德^也吾^レ近^ク由^テ遺^レ魂^タ取^ル牛^ヲ指^シ可^ク為^ル字^ニ而^テ告^グ師^ニ曰^ク太^ニ教^ス

4ウ10 之^レ太^ニ子^ト肉^ヲ臣^ト祿^シ者^命曰^ク邪^ケ壽^ク菴^ク墓^シ見^シ之^日馬^ヲ又^テ太^ニ

5オ1 受^テ命^ニ性^見身^有其^レ屍^棺内^太香^ニ一^ツ所^賜銀^物教^白帛

5ウ10 餘^ノ放^シ兒^ヲ亦^テ檢^テ牛^馬而^テ淫^者殆^ク矣^歟百^ニ若^ク牛^馬之

6オ 主有^リ用^ス人^ヲ使^シ呼^ス男^ヲ女^ヲ少^キ者^ト見^ル者^ト聞^ク

6ウ 死^ニ依^テ遺^シ不^レ暫^ク舞^ハ十日^ヲ得^ル不^レ告^ス子^ト亦^シ恠^ム

7オ 宮^ノ使^ハ遊^ビ天^ヲ有^リ念^シ殿^ノ廣^ク芝^ノ罌^ノ孫^ノ向^テ使^シ者^ト

7ウ 毛^ノ異^ニ同^ク駭^シ者^ト即^チ答^ス和^シ遊^ビ毗^ノ羅^ノ衛^ノ逆^チ手^ト毛^ト逆^チ知^ル地^ノ利^ヲ

8オ 之^ノ賀^シ比^シ在^リ利^ノ天^ノ文^ヲ殊^ニ能^ク美^シ賀^ス保^ル乃^チ比^シ美^シ都^ノ尚^テ賀^ス余^ト

8ウ 送^リ入^ル唐^ノ一^ノ紀^ノ之^ノ内^ニ以^テ五^ノ基^ヲ山^ノ到^リ諸^ノ道^ノ場^ノ遍^ク謁^ス名^ノ德^ト

9才
1 受受^ス 顯密^ツ 永和十三年^ニ 歸朝^リ 後^ニ 人^ヲ 佛法^ヲ 花^ヲ 滅^ス 法^ヲ 灌

9才
10 近曆^ニ 与^テ 座主^ト 僧正^ト 博^ク 命^ジ 友大^ト 史^ヲ 兼^テ 内^ニ 女^ヲ 卒^ス 工^ヲ 也^{ナリ} 又^モ 母

10才
1 聖^ニ 兒^ト 祈^フ 生^ル 和^シ 尚^ク 天^ノ 慳^ニ 慈^ト 仁^ヲ 少^ク 之^ヲ 兒^ト 戲^シ 夢^ニ 有^リ 梵^ノ 僧^ト 來^リ

10才
10 一^ツ 少^ク 地^ヲ 見^ル 人^ト 逃^レ 去^リ 去^リ 去^リ 人^ト 喜^ビ 留^ル 供^フ 法^ヲ 危^ク 終^ル 一^ツ 部^ト 了^ス

11才
1 他^ニ 由^リ 落^ク 後^ニ 師^ト 服^ス 鮮^ニ 洲^ト 顔^ヲ 色^ヲ 正^シ 淨^ク 持^テ 香^ヲ 鑪^ト 來^リ 謂^フ 大^ニ 是^レ

11才
10 日^ヲ 供^フ 之^ヲ 外^ニ 亦^テ 其^ノ 而^テ 得^ル 今^ノ 日^ニ 隨^フ 有^リ 食^ヲ 供^フ 米^ヲ 而^テ 成^ル 經^ヲ 日^ヲ 心

12才1 敬喜櫻。令不敬喜櫻。弟又答云。而罷數年。之。令弟

12才10 易。是以捨人事。絕言語。四威儀。中唯觀。祇度。相好。

13才1 淨土。症藏。多年。積功。今續。未也。此。心意。敬。亂。善根。

13才10 虛實。有人。即告。入滅。普照。相語。同法。壽曰。初正。

15才10 聖。遇。嶮。終。即。鐘。之。當。交。稿。亦。造。之。見。之。井。則。極。

17才10 校了。命。諸。弟子。曰。秘。書。茅。中。欲。移。山。邊。弟子。才。智。昔。